

< 2014年11月 >

入れ歯とともに第二の人生

国保連合会嘱託 ひがしだ 東田 ふみお 文男



用意された食事を前に、口を大きく開け、妻？に歯の痛みを訴える男をリアルに描いた平安時代の絵巻物(国宝)が残されています。病やまいのそうし草紙と呼ばれる一図で、ネットで見られますので興味のある方をご覧ください。絵に添えられたことばがき詞書には「歯がみな揺らいで……食べるのが耐えがたい」とあり、今でいう歯周病のようです▼その歯周病に、やられてしまいました。先月、3本の歯がポロリと抜けてしまったのです。「歯痛などは病気ではない」と、あなどってきた長年のツケが回ってきました。自業自得とはいえ、部分入れ歯と相なりました。今頃になって歯ぎしりしています▼入れ歯といえば、米1ドル紙幣に描かれている初代米国大統領のジョージ・ワシントンが有名です。28歳で部分入

れ歯を使い始め、大統領になり肖像が描かれた時には1本の歯も残っておらず総入れ歯だったといます。噛み具合が悪かったのか、晩年は怒りっぽかったといます▼歯型は万人不同で、DNAや指紋とともに身元確認の有力な手段となっています。治療跡や歯の本数から年齢を、歯のすり減りやかみ癖から職業、生活習慣などが推定できるといい、歯型はまさに「その人そのもの」といえます▼「一日のお勤め」を終えた入れ歯を、別のハブラシで磨いた後、専用の容器に入れ、洗浄剤で除菌する生活が始まりました。「入れ歯は、あなたの第二の人生の良きパートナーですよ」と歯医者さんに励まされています。歯周病や虫歯に歯止めがかかることを願っていますが、さてさて、どんな「入れ歯人生」が待っていることやら。

